

ヨゼフ・ピタウ学長から40年

—ソフィア・ミッションとアジア地域研究—

上智大学アジア人材養成研究センター所長
2017年ラモン・マグサイサイ賞受賞者
石澤良昭

A-1 大学をあげて「難民救済」のソフィア・ミッション（国際奉仕活動）（1979年から）

カンボジアでは、1970年から隣国のベトナム戦争の煽りを受け、大混乱がはじまった。ポル・ポト政権（1975年－1979年）下では約150万人以上の大虐殺があった。こうした政治混乱から数百万人のカンボジア人難民がタイ国境に逃れた。その後、カンボジアではベトナムに支援されたヘン・サムリン政権が誕生（1979年）した。同派に加えて、ポル・ポト派、シハヌーク派、ソン・サン派の4派に分かれての内戦が1993年まで24年間続いていた。

「ソフィア・ミッション」というのは1979年から始まる上智大学の教職員・学生・賛同者による国際奉仕活動である。私たちはカンボジア人難民問題を見過ごすわけにはいかなかった。大学では1979年から「インドシナ難民に愛の手を」の救済キャンペーンを開始。同年12月、J.ピタウ学長を中心に教職員が新宿駅の駅頭に立ち、「インドシナ難民に愛の手を」のために募金活動を実施した。そして、タイ国境にあるカオイ・ダンやサケオなどの難民キャンプへ食糧と医薬品を届け、戦争孤児を収容するセンターには学生ボランティアを派遣した。

水面下では和平交渉が進み、1991年10月にカンボジア和平パリ会議が開催された。このパリ和平協定により、ヘン・サムリン政権を含む4派による最高国民評議会（SNC）が設置された。日本からは今川幸雄特命全権大使がプノンペンに赴任した。1992年、明石康氏が国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）代表に任命され、さらに、国連難民高等弁務官（UNHCR）の緒方貞子氏（本学名誉教授）がカンボジア人難民の早期の帰還実現に尽力された。そして、カンボジアは1993年に王国として再発足し、ゼロからの国家建設が始まった。

A-2 難民は「人間としての」「人間らしさの根本」の問題である —上智大学の決意—（1980年）

J.ピタウ学長は、「今、インドシナ半島では、何十万、何百万という人々が故郷を追われ、難民となって苦しんでいる。この人々のことを忘れてはなりません。上智大学では、去年（1979年）の暮れ以来、この人々のために募金運動を行ったばかりではなく、今、ボランティアの（上智の）学生たちが、現にタイの難民キャンプで、懸命に奉仕活動をつづけております。私たちは、単なる思いつきでこんなことを始めたものではありません。これこそ、上智大学の根本的な理念、さらには、人間としての、人間らしさの根本にかかわることだと信じればこそ、この活動を行っているのです」と語り、新宿駅で募金活動を行った。（『上智大学通信』第84号1980年3月25日発行）

さらにJ.ピタウ学長は続けて「学内での募金だけでなく79年末に私（ピタウ）が新宿駅で街頭募金を行うと、教職員、学生が自発的に駅頭に立ち始めたのはうれしいことでした。約2週間で700万円の募金が集まりました。タイの難民キャンプに飛びました。食糧と医薬品を届け、さ

らに（上智の）学生をボランティアとして（孤児センターに）派遣できないかと考え、その視察も兼ねました。カンボジアとの国境近くに点在する難民キャンプをいくつか訪ねました。悲惨な光景でした。その中の一つで、孤児を収容する「孤児センター」を見て、ここなら学生でも一緒に遊び、身の回りの世話などができるのではないかと考えました。翌年2月から2年間、学生や教職員が次々と現地入りしました。」とその決意を述べた（『時代の証言者』読売新聞 2009年11月5日）。

A-3 カンボジア民族の栄光の精神的支柱アンコール・ワットをカンボジア人の手で救済 (1980年)

なぜ民族の元気を取り戻す起爆剤がアンコール・ワットなのか。なぜなら、アンコール・ワットは民族栄光の象徴である。ポル・ポト政権下では、遺跡保存官は知識人と見なされ、40数名のうち、生きて帰ってきたのは3名だけであった。難民救済と遺跡救済を掲げるソフィア・ミッションは、内戦で傷つき、失意のカンボジアの人たちを慰め、民族として誇りを取り戻してもらいたいと願い、カンボジア人のだれもが崇敬する「アンコール・ワット（修復工事）」をカンボジア人の手で修復することを提案した。遺跡救済班は1980年代に戦塵の煙るカンボジア国内に入り、1993年からアンコール・ワット西参道においてカンボジア人の保存官養成を開始した。カンボジア人同士の民族の和解とアイデンティティ再構築のため、アンコール・ワットの修復に手をつけたのである。私たちの提案はさらに一歩進めて、「カンボジア人による、カンボジアのための遺跡修復（By the Cambodians, for the Cambodians）」を保存官養成の目標に掲げた。上智大学は、現地カンボジアに土地を購入し、「上智大学アジア人材養成研究センター」を1996年に建設した。日本の大学として東南アジア現地に常設の地域研究拠点を開設したのは初めてであった。カンボジアを拠点としたアジア地域研究を目標に掲げているが、当面は、難民救済とアンコール遺跡救済を継続し、ゼロになったカンボジア人保存官の養成を実施してきた。

A-4 J. ピタウ学長年頭挨拶は「アジアと協力し、新しい世界を築くためアジア研究を強化」 (1980年)

「今年は80年代の最初の年になりますが、これから上智大学はどのような道を歩むべきか。「量より質」、それは私たちの今まで一つの基本的な方針でしたが、これからもそれを強く打ち出したいと思います。この80年代、私たちの夢であった中央図書館も完成するでしょう。そこで、学問的雰囲気を高める、精神的なものを深めるということは、私たちの今後の課題であると思います。第2に上智大学の建学の精神を考えてみますと、この永遠の価値のための教育を与えるべきでありましょう。第3に私の一つの大きな希望ですが、今までどちらかというと上智大学は西洋に目を開いて、西洋中心に国際性を強調してきました。これからの80年代ではアジアを中心にしながら、アジアを理解し、さらにアジアと協力して新しい世界を作るという使命があると思います。つまり国際性の意味を再考する、その意味で4年前に立てた10年計画の中にアジア研究を強化するという項目が盛り込まれています」（『上智大学通信』昭和55年（1980年）1月23日発行から引用）。

A-5 アジアと協力して新しい世界を創る「アジア文化研究所」の設置を決定（1980年－1982年）

上智大学は1980年5月の理事会においてアジア研究体制（アジア文化研究所設置構想）を承認した。そして、大学評議会（1980年6月25日）の議題として、「アジア文化研究所（仮称）設置案」が諮られ、J.ピタウ学長からその構想案が述べられ、設置の主旨を承認した。さらに、「アジア文化研究所（仮称）」設立準備委員会第1回会合（1980年9月30日）が開かれ、準備委員会委員長から説明があった。「既存の研究組織において欠けている分野を当面は考えていきたい。例えば、イスラム研究を目的の中心とする。アフリカも含むことになるかもしれない。歴史・宗教などの人文系社会科学系研究に重点を置く。対象国としてはフィリピン、インドネシアは含まれるがイスラムが中心である。新地域名を挙げたのは新鮮味を持たせるためでもある。地域研究としてフィリピン、インドネシア、西南アジアを3本の柱とする」。そして「アジア文化研究所（仮称）」設立趣旨としては、「東アジアの一隅において、キリスト教的ヒューマニズムを基礎として、東西文化交流を念願する本学の建学の理念にかんがみ、近隣友邦たるアジア諸地域の宗教・言語・社会・歴史等を総合的に調査研究し、必要な教育活動を行うことの重要性が、今日ますます高まりつつある。そのため、将来恒久的に本学の特色の一つとなるようなアジア諸地域の文化および社会に関する研究、とりわけ、その地域の伝統文化、伝統的生活様式についての専門的研究を行う、さらにその理解の上に、現代の社会・文化諸現象を把握することを目指した研究機関の設立が望まれる。このような研究機関を設立し、アジア諸地域との学術文化交流を図り、また研究、交流の成果を世に問うことをもって、アジアのみならず世界の平和と発展に寄与しうることを期して、本研究の設立（1982年）の趣旨とする」。

次にアジア地域に関する、授業を開講する「アジア文化副専攻（仮題）」新設の件については、外国語学部教授会がこの設立を受け入れ、「アジア文化副専攻（仮題）」が承認された。大学評議会（1981年2月18日）において上智大学アジア文化研究所規程が承認された。そして外国語学部がアジア文化研究所の設立母体になることを承認。柳瀬陸男学長が兼務ではあるが、初代アジア文化研究所長に就任された。

A-6 アジア文化研究所内に「アンコール調査室」を開設（1992年4月1日）

上智大学は1979年からインドシナ難民の救済活動に取りかかった。1982年に設立されたアジア文化研究所では、所長を含めて3名の所員で発足したが、さしあたり、カンボジア難民問題に取り組み、アンコール遺跡の救済問題を継続することになった。1980年代後半からカンボジアでは、平和構築に向けて作業が始まり、国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）、日本の自衛隊の活動（PKO）など、マスコミはカンボジア報道に終始した。

日本では、産・学・官の有志が集まり、アンコール・ワット救済の任意団体が結成された。正式には1991年4月17日に「アンコール遺跡救済委員会」が設立され、会長に石川六郎氏（鹿島建設(株)社長）、事務局長に石澤良昭アジア文化研究所長、監査役に酒井幸弁護士（上智大学アンコール遺跡国際調査団副団長）が就任した。次に、同顧問に就任した大谷啓治学長（1993年－1999年）の指示により、同委員会の事務局「アンコール調査室」が本学アジア文化研究所内に開設された。同委員会には、外務省・文化庁をはじめマスコミ各社、ゼネコンなど約65社が参加した。同年4月29日には「アンコール遺跡救済日本代表団」31名がアンコール遺跡の現場を視察し、フ

ン・セン首相を表敬訪問した。同年10月にはカンボジア和平協定がパリで調印された。

上智大学は、前述のとおり1979年の難民救済とアンコール・ワット救済の両問題に取り組むため、カンボジア現地に大学の海外研究施設を建設することになった。その上智大学アンコール研修所は、敷地4,800㎡、研修所母屋282㎡、倉庫36㎡である。開所式は、1996年8月29日に行われ、カンボジア王国政府ヴァン・モリヴァン（Vann Molyvann）国務大臣など関係者80人が列席し、大谷学長が式辞を述べた。土地の取得費を含め、研修所建設の総経費は、全額寄付で賄われた。朝日新聞㈱、㈱東京海上日動キャリアサービス、㈱資生堂、㈱求龍堂および個人の篤志家などからご厚意が寄せられた。住所は、カンボジア王国シェムリアップ州のSiem Reap郡（Srok）のPhum Treang Slokram村である。

A-7 「アジア人材養成研究センター」と改称 —大学海外研究拠点の「グランド・レイアウト」第1号—（2002年—2013年）

学校法人上智学院理事会は、2001年5月、創立100周年（2013年）に向けて、「上智大学 教育・研究・キャンパス再興グランド・レイアウト（新ホフマン計画）」を学内外に発表した。その第1号は「アジア人材養成研究センター」の設置であった。設置の趣旨は、①アジア現地に暮らす人たちの自立を援ける地域研究の施設である。同時に、②アジア現地から学び、そこに住む人たちとの協働作業（調査・研究・現場実習など）を通じて地域の発展に貢献し、村落・環境・地域開発・生態系および文化遺産などの新しい地域資源の研究を行う。③上智大学の各学部および大学院各研究科等と密接に協力しながら、アジアの地域研究、中でも東南アジアや南アジア等を研究し、現地の州政府・市町村と提携する。本研究センターは、カンボジアにおける人材養成に加え、④そこから生まれる地域発の濃い地域研究を基軸に、地球世界およびアジア世界に学術貢献することを目標とする。設置の形態は、「大学附置教育研究機関」であり、現地に寄り添う「イエズス会方式」である。⑤上智大学の教育精神「Men and Women for Others, with Others（他者のために、他者とともに）」を、現地アジアにおいて実践していく。そして、⑥例えば、カンボジアには学ぶべき「知」の遺産があり、その上で私たちは日本の「知」を語るという姿勢を貫いてきた。それがカンボジアの人たちの信用度（クレディビリティ）を高めてきた。⑦遺跡の保存修復の人材養成の国際協力は、遺跡（文化）と村落（人間）と森林（自然）を三位一体に捉え、周辺の地域住民の協力を得て展開していく。

A-8 どのような地域人材を養成するか（1996年—現在）

上智大学の地域研究は、現地研究拠点に立脚した地域研究であり、現地の固有の問題などの研究を出発点として構築され、そこは研究者が現地に捧げる研究作業の場であり、住民との共同作業場としても成立する。日本の大学として初めて設置されたアジア地域研究の拠点である。アジア現地の地域的固有問題を解明し、そのうえでグローバル・イシュー（世界的課題）に取り組み、そこは定点観測をする研究拠点でもある。

1) 保存官・石工等の養成：

1991年からの考古発掘および遺跡修復の現場実習の経験に基づき、考古・建築・保存科学系のカンボジア人研修生・保存官候補を受け入れ、学位取得もしくはこれに準じる学術・技術を習得

し、国際舞台で活躍できる保存官および地域研究者の候補を育成する。

2) アンコール地域研究者の養成：

保存官・地域研究員・石工・作業員の中から、自然（森林）・人間（村落）・文化（遺跡）を基軸にした自国（カンボジア）研究を推進する研究者を育成する。遺跡保存・地域研究・文化観光学・伝統文化等の分野における専門家・研究者が輩出されることが期待される。

3) 文化遺産保全のボランティアの養成：

①遺跡を守るボランティア、②村落儀礼等を守るボランティア、③自然環境・森林などを守るボランティアを育成する。④遺跡近隣に住むパゴタの僧侶・村の役人・サラリーマン・小中学校の教員などが、村人を対象に文化遺産保全講座を開き、遺跡の意味・価値・重要性を講義し、時には発掘・修復現場見学会を開催し、理解を深めることを目標とする（「アジア人材養成研究所センター設置の趣旨」2002年10月グラント・レイアウト、第1期（2001年－2005年）上智学院理事會）。（参照：『東京人』（都市出版）No. 333 上智大学と四谷界隈の100年 2013年12月増刊号 pp. 50-53）

（A-4からA-8については以下を参照：石澤良昭：ヨゼフ・ピタウ先生とアジア人材養成研究所センター—グラント・レイアウト第1号、アジアへ出かけてソフィア・ミッション—『アンコール遺跡を科学する』第20回アンコール遺跡国際調査団報告（2016年）pp. 11-28、上智大学アジア人材養成研究所センター）

B-1 王国政府は幹部養成が急務：カンボジア人留学生の大学院教育 —学位取得プログラムから—（1994年－2014年）

最初のカンボジア人留学生3名は1994年に上智大学大学院地域研究専攻へ入学した。これらの留学生は、王国政府の幹部候補生であった。合計18名の留学生は、英語による博士学位請求論文を5年間で仕上げなければならなかった。彼らは国づくりを背負って来日したが、論文執筆に必要な英語は、母国が内戦状態だったため、ほとんど学習する機会がなかった。初年度、彼らは上智大学の学内で開講されている英語の授業に聴講生として出席した。手を差し伸べてくださったのは、SJハウスの神父様（複数の先生）であった。英語の論文の添削を手伝ってくださった。それに、同級生の日本人院生など、上智大学が総がかりでカンボジア人留学生たちを支援した。学位請求論文提出者は、18名（博士7名、修士11名）であった。全員が母国に戻り、カンボジア王国政府の要職に就き、現在活躍している。

プノンペン大学副学長オム・ラヴィ女史およびカンボジア王国文化芸術省副局長エック・ブント氏の両氏は本学大学院卒業生であるが、2019年度に「日本・カンボジアの友好親善に貢献した」として、日本政府（外務省）からカンボジア人として初めて、表彰を受けたのであった。両氏の受章伝達式は在カンボジア王国の日本大使館において行われた。上智大学にとっては何よりも嬉しいニュースであった。（参照：『アンコール遺跡を科学する』第21回アンコール遺跡国際調査団報告（2020年）p. 12、上智大学アジア人材養成研究所センター）

B-2 アンコール・ワットで民族再団結工事 —西参道修復の第1期起工式—（1996年－2007年）

1996年（平成8年）8月29日、起工式には大谷啓治学長が出席してシェムリアップ市内で行わ

れた。この西参道工事は、カンボジア王国政府アンコール地域遺跡整備機構（略称：国立アプサラ機構）との共同事業であり、上智大学は国家再建に奔走するカンボジアの人たちを励まし、ゼロから国づくりをはじめた彼らを勇気づけた。波及効果が大きいこの民族再団結の工事は、日本大学片桐正夫教授（故人）および石工棟梁小杉孝行氏（故人）の指導によりアンコール・ワットで開始された。2007年11月、西参道200mのうち、第1工区100mが12年に及ぶ修復工事を経て完成した。若手カンボジア人保存官の実習をかねて実施された。カンボジア王国の副首相ソク・アン（Sok An）閣下が出席のもと、近隣住民2,400名が集まり、渡り初めが行われた（参照：上智大学アンコール遺跡国際調査団編『アンコール・ワット西参道修復工事第Iフェーズ』2011）。

B-3 世紀の大発見：274体の仏像を地中から発掘 —イオン(株)の協力で現地に仏像博物館の建設— (2001年－2010年)

2001年に、考古学の研修中のバンテアイ・クデイ寺院境内から、偶然にも274体の仏像が地中の埋納坑から発掘された。文字どおり世紀の大発掘となった。ジャヤヴァルマン8世（1243年－1295年）は、ヒンドゥー教を篤信し、反対派の仏教徒への見せしめに「仏像狩り」を命じた。これら大量の国宝級の仏像が、考古学現場実習中のカンボジア人研修生の手で発掘されたのである。2010年8月、同じ境内からさらに8体の仏像が発掘されている。2002年3月、岡田卓也氏（イオン(株)名誉会長）が、アジア人材養成研究センターに立ち寄られ、一時保管していた廃仏274体を見学された。氏は仏像尊顔の美しさに感動し、これらを展示するための博物館建設を提案、その建設費全額を本学に寄付された。新博物館は、16,200㎡の敷地に建築面積1,728㎡の2階建てである。2007年11月2日、シハモニ国王ご臨席のもとに、博物館の落成式が挙行された。同時に、イオン(株)からはこの博物館建物の贈呈状が国立アプサラ機構へ交付された。博物館入り口正面には、カンボジア王国の国章が掲げられ、カンボジアでも最も格式の高い仏像博物館として設置された（仏像の図録は：石澤良昭監修・著『シハヌーク・イオン博物館 アンコールの仏像』NHK出版2007）（参照：特集カンボジア支援としてのミュージアム「シハヌーク・イオン博物館」『Musée（ミュゼ）』83号（2008年1月25日）pp. 8-17）。

B-4 上智大学学外共同研究：アンコール遺跡の環境保全プロジェクト —ISO14001認証取得— (2003年－現在)

2019年にアンコール地域を訪れた観光客は約650万人を数えた。2000年頃からの観光客の急増に伴い、遺跡環境が劣化し、膨大なゴミ、車両排気による大気汚染、未処理下水による川の水質汚染、ホテルや駐車場建設による自然林の破壊、歴史景観の消滅など、深刻な問題が起こっていた。ユネスコなどからは、環境破壊の大きな懸念が示された。私たちは2003年5月から「上智大学学外共同研究プロジェクト」を立ち上げ、アンコール遺跡環境保全のための「ISO14001」の認証取得に向けてアプサラ機構と協力し、約1,200名の全職員と実務者に対して環境保全の実務研修を3年間にわたり実施してきた。実務研修では、上智大学アジア人材養成研究センター、国際規格研究所、日本品質保証機構（JQA）が環境保全教育を担当し、ISO取得マニュアルのテキスト（英語）をカンボジア語に翻訳し使用した。関係者全員が遺跡現場を廻り、さらに集落や中学校も訪問し、ゴミ・ゼロのコンクールを実施した。村の僧侶たちにも協力をお願いした。取得

のための準備期間は3年間、ISOの求める「環境マネジメント」とは何かを想定しながら、アプサラ機構、地域住民、関係者が一丸となって審査を受ける準備を行っていた。その結果、厳しい審査を経て、2006年3月「ISO14001認証」に合格し、晴れて認証を取得できたのである。そして、同年4月、アンコール・ワットにおいて認証式が行われた。遺跡入場証には「ISO14001」という文字が印字されている。数ある「世界遺産」のうち、ISO14001の取得は、アンコールが世界で初めてであり、ユネスコから高く評価された。これは上智大学のアンコール遺跡群の環境保全に対する大きな貢献である。取得後3年ごとの継続審査に合格し、現在に至っている（参照：『上智大学通信』第319号 2006年6月20日発行2面）。

B-5 カンボジア発上智大学21世紀COEプログラム ―アジアにおける「知」の再編成を目指す―（2002年－2006年）

文部科学省公募の「21世紀COEプログラム（2002年－2006年）」では、本学が提出した「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」が採択された。その採択の理由を日本学術振興会は、「カンボジア、特にアンコール・ワットの歴史文化の総合調査研究・交流などの実績は評価できる。上智らしい国際性を活かし、グローバル・スタディーズの構築をさらに具体的に進められることを期待する」（日本学術振興会HP）であった。カンボジアにある本学のアジア人材養成研究センターを会場として、4年間にわたり4回の国際シンポジウムが開催された。第1回「地域から発信するグローバル・スタディーズの方法論構築」2002年12月27日～29日／出席者約180名（8カ国）、第2回「文化遺産とアイデンティティとIT（情報技術）」2004年3月12日～14日／出席者約130人（12カ国）、第3回「カンボジア版地域自立型発展は可能か―小さな民と農民の声を発信させよう」2005年2月21日～22日／出席者約120名（9カ国）、第4回「文化遺産と環境と観光」2005年12月31日～06年1月1日／出席者約180名（11カ国）（参照：石澤良昭・丸井雅子共著『グローバル・ローカル文化遺産』上智大学出版会 2010）。

B-6 文部科学省公募の「大学教育の国際化推進プログラム」に採択（2006年－2009年）

上智大学は「文化遺産教育戦略に資する国際連携の推進 ―熱帯アジアにおける保存官・研究者等の国際教育プログラム」（2006年－2009年）を申請し、採択された。カンボジアにある本学研究センターにおいて、4年間にわたり文化遺産の保存・修復をメイン・テーマに掲げた大学院レベルの講義および現場研修が実施された。このプログラムは本学大学院の地域研究専攻内に併設され、日本で初めて国境を越えて併設された「文化遺産学」の大学院教育であった。英語によるアジア文化遺産の専門家会議であり、併せて現場体験の研修が実施された。教授陣は日本、フランス、カンボジア、ミャンマーから、大学院学生は日本、フランス、カンボジアから4年間で約90名がカンボジアのシェムリアップにある上智大学アジア人材養成研究センターに集まり、上智大学大学院の実習認定単位が付与された（参照：石澤良昭編『文化遺産教育戦略に資する国際連携の推進 ―熱帯アジアにおける保存官・研究者の国際教育プログラム―』上智大学アジア人材養成研究センター刊、2006～2009）。

B-7 「上智大学国際化拠点整備事業（グローバル30）」 ―現地アジアでの上智モデル事業― (2009年－2013年)

本学は全国の13大学とともに「グローバル30（国際化拠点整備事業）」（2009年－2013年）に採択された。全国の大学の中から上智大学が選ばれたことは何よりの快挙であった。本学では理工学部において英語による大学院教育を実現し、その後の大学院教育と研究の深化につながった。

国際化拠点整備事業では、アジアにおける事業現場の視察のため、2012年1月、中川正春文部科学大臣（当時）はじめ随員10人の日本政府文部科学省関係者が、アンコール・ワット西参道修復工事現場を訪れた。現地では本学大学院で学位を取得したカンボジア人リ・ヴァンナ博士（シハヌーク・イオン博物館長：当時）や5人のカンボジア人大学院卒業生、アンコール・ワット西参道の工事を担当した保存官や技官（石工職）ら19人が一行を出迎え、本学のカンボジアにおける20数年に及ぶ国際協力事業と現地の人材養成の成果について、彼ら自身が英語で説明した。建学の精神と結びついた本学のアジアにおける国際化拠点事業は、「上智モデル」として世界から注目され、先駆的研究と教育活動の事業として評価された。

B-8 文化庁「国際協力拠点交流事業 ―カンボジアにおける文化遺産保存のための拠点交流事業―」(2010年－2013年)

本研究センターは、文化庁の「カンボジアにおける文化遺産保存のための拠点交流事業」（2010年－2013年）により4年間にわたり約20名のカンボジア人考古学・建築学の学生に文化遺産保存修復の保存官・専門家養成プログラムを実施した。日本・カンボジア両国の教授陣が専門講義と実習を担当した。同プログラムは、第1回が2010年7月～9月、第2回が2011年7月～9月、第3回が2011年12月、第4回が2013年7月～9月にわたり実施された。併せて、公開シンポジウム（英語・カンボジア語）「*International Symposium on Khmerology in Phnom Penh*（クメール学研究国際シンポジウム）」は、2012年1月にプノンペン大学で開催された（石澤良昭編『カンボジアにおける文化遺産保存』アジア人材養成研究センター2013）。

B-9 文化庁「国際協力拠点交流事業 ―東南アジア5ヵ国における文化遺産保存のための拠点交流事業―」(2014年－2016年)

「東南アジア5ヵ国における文化遺産保存のための拠点交流事業」がカンボジア現地の本学アジア人材養成研究センターで開かれた。タイ・ミャンマー・ベトナム・ラオス・カンボジアの大陸部東南アジア5ヵ国から石造文化遺産の現場の担当者43名が集まり、各国のカントリー・レポートが発表され、熱気あふれる質疑応答が行われた（参照：『東南アジア5ヵ国における文化遺産保存のための拠点交流事業 成果報告書』2014年、2015年、2016年刊行の全3巻、上智大学アジア人材養成研究センター刊）。

B-10 アンコール・ワット西参道をオール・ジャパンで修復 ―第2期工事始まる― (2016年－2024年)

アンコール・ワット西参道の修復工事の第2期工事（2016年－2024年）は国立アプサラ機構と共同工事として着工した。この工事では、日本国外務省のODA（一般文化無償資金協力 機

材供与9,400万円) が付与された。日本から修復に必要な機材が現地に届き、現在使用している。両国の専門家が「アンコール・ワット西参道修復技術交流研修委員会」(技術教育・工事指導)をつくり、技術問題を協議しながら施工を進め、2020年で4年目となった。この間、合計4冊の工事報告書が刊行された(参照:アンコール・ワット西参道修復技術交流研修委員会編『アンコール・ワット西参道第2工区・第3工区 修復工事設計・施工計画』2017、『アンコール・ワット西参道第2工区・第3工区 修復工事設計・施工基本計画』2018、『2018年度活動成果報告書』2019、『2019年度活動成果報告書』2020 これら4冊、上智大学アジア人材養成研究センター刊)。

B-11 ソフィア・ミッション(上智大学)が国際社会から評価され、2017年ラモン・マグサイサイ賞を受賞(2017年)

上智大学の国際奉仕活動ソフィア・ミッションが高く評価され、アジアのノーベル賞といわれているR・マグサイサイ賞を本研究センター所長石澤良昭が代表して受賞した。授賞式は2017年8月31日、フィリピンのマニラ市内で行われた。同賞は、フィリピンの故ラモン・マグサイサイ大統領を記念して創設された国際賞である。授賞式では、同賞財団の評議員より、「アンコール・ワット遺跡保存修復は、カンボジア人の手でなされるべきとの信念に基づき、①アンコール遺跡を守るカンボジア人専門家の人材養成に尽力したこと、②カンボジア人が民族として誇りを取り戻すきっかけとなったこと、③アンコール・ワット遺跡に代表される文化遺産を国際社会が人類の至宝として保存していく重要性を広く世界に訴求したこと」が受賞理由として述べられた。

この受賞は、上智大学がカンボジアで推進してきたソフィア・ミッションに対する国際的な評価である。大学からは財政支援を継続的にいただき、ソフィア・ミッションが実施できた。心から感謝いたしたい(石澤談)(石澤良昭教授マグサイサイ賞受賞記念講演会『建学の精神をアジアの現地で実践』2017年11月6日)。

B-12 文化庁「アセアン10カ国における文化遺産の継承と博物館の新しい役割のための拠点交流事業」(2017年-2019年)

アセアン10カ国では国内の道路・ホテルなどの建設により「開発遺物」が出土し、その取扱いに博物館が苦慮している事実に基づき、10カ国の担当者にアンコール遺跡に集まってもらった。カンボジアの先行事例に基づき「開発遺物」の問題を討論し、その問題点を3冊の報告書にまとめた。会場はシェムリアップ市(上智大学アジア人材養成研究センター)。ワークショップ実施日:2017年11月13日~19日、2018年11月2日~8日、2019年11月25日~12月2日の3回(参照:石澤良昭編『アセアン10カ国における文化遺産の継承と博物館の新しい役割』No.1~No.3、上智大学アジア人材養成研究センター刊、2017~2019、東京)。

(英語発表:ISHIZAWA, Y: Activities for Exchanges in International Cooperation for Inheritance of Cultural Properties and the New Role of Museums within ASEAN 10 Countries (Report on International Workshop in 2017-2018) ICOM (国際博物館会議) KYOTO 2019 Venue: Inamori Memorial Hall Kyoto, Date: 2nd September 2019)

B-13 古窯跡発掘のためのカンボジア人中堅幹部養成特別研修（1999年－2000年）

カンボジアのシェムリアップ州タニ村で大規模な古窯跡群が発見された。日本の国際交流基金の支援により、タニ村の窯跡群において古窯跡保存についての研修が実施された。日本とカンボジアの考古学研修生12名が出席し、上智大学青柳洋治教授（故人）および杉山洋研究員（奈良文化財研究所）から窯跡整備・公開展示について、詳しい講義と保存の実践例が示された（参照：石澤良昭編『古窯跡発掘のためのカンボジア人中堅幹部養成特別研修2ヵ年計画』報告書、上智大学アジア人材養成研究センター、2000）。

小さなソフィア・ミッションの活動記録

C-1 3神父が学生交流プロジェクトを開始（1959年－1964年）

イエズス会3神父（P. Riestch, SJ（東京、SJハウス）、Gomane, SJ（バンコック、イエズス会学生寮）、Larre, SJ（ベトナム・ホーチミン市、イエンド・イエズス会学生寮））は、AUVIT（Amitié Universitaire entre Vietnam-Japon-Thaïlande）を立ち上げ、東南アジア3カ国の学生交流を実施してきた。ベトナム戦争勃発のため1964年に中止。

C-2 王立芸術大学（プノンペン）における日本人教授陣による集中講義（1991年－2001年）

場所はプノンペン市内の王立芸術大学校舎（期間：1991年－2001年）。受講学生延べ約2,800名。カンボジア人教授がポル・ポト政権下の知識人粛清により行方不明になり、専門講義が開講できなかった。上智大学は同大の窮状を助けるため、日本人教授陣が特別講義をできるようにプロジェクトを立ち上げた。日本人の教授・専門家はアンコール遺跡における人材養成のため、プノンペン経由で同国へ出入国するが、シェムリアップへの往復途中で下車し、プノンペンに滞在し、専門分野の集中講義を担当した（上智大学アンコール遺跡国際調査団のボランティア活動）。

C-3 NHKスペシャル「水の帝国 アンコール・ワット」（1997年）

1997年11月16日に全国放映。JICA作製の5000分の一地形図資料に基づき、国際航業(株)のコンピュータグラフィックを駆使させていただき、約900年前のアンコール王朝時代の田越灌漑を復元し、その画面上に再現した。アンコール王朝の繁栄を支えた水利都市の解明につながり、たいへん好評を博した。B. Ph. グロリエが1979年に提示したアンコール王朝最盛期の可耕地面積60万ヘクタール、粳米生産約12,600トン、1平方キロあたりの人口密度526人という数字は、いくつもの石造大伽藍を造営中の建築作業員とその家族の食糧を賄うという点から考えると妥当な数字である。このJICA作製の5000分の一地形図資料により、グロリエの水利都市論が裏付けられた。画期的な大発見であった。

C-4 NHK「プロジェクトX、挑戦者たち、アンコール・ワットに誓う師弟の絆」（2001年）

2001年11月21日放映されたこの番組は、大好評を博した。日本航空の機内番組としても採用された。物語は内戦のあとカンボジアではゼロからの国家再建が始まり、アンコール・ワット修復を手伝う日本人石工棟梁小杉孝行氏（故人）とそこに弟子入りしたカンボジア人石工トイさんと

の実話である。アンコール・ワットをカンボジア人の手で修復しようと立ち上がった石工トイさんの奮闘物語である。国家再建にかけるカンボジア人の根性物語でもある。

C-5 アンコール文化遺産教育センターの開設 ―地域の住民と手を携えて文化遺産を守る活動― (2011年)

2011年12月、バンテアイ・クデイ遺跡内に「アンコール文化遺産教育センター」が日本国外務省の「草の根文化無償」により建設された。開所式には佐久間勤理事（現上智学院理事長）が学院を代表して出席した。このセンターは周辺の住民および小学校・中学校生徒に対し、自国の文化遺産への理解の深め、保存活動に参加してもらえるよう教材パネルを常設展示している。

C-6 国際シンポジウム「過去から未来へ アジアにおけるカトリック教会の使命：上智大学の貢献」 International Symposium : Between Past and Future, the Mission of the Catholic Church in Asia : the contribution of Sophia University (2014年)

ローマで開催された上智大学創立100周年記念事業である。石澤所長が“*International Cooperation among Jesuit Universities in Asia, Sophia's Current Development of Human Resources in Cambodia*”を研究発表した。日時：2014年3月14日・15日。会場：ローマ教皇庁立グレゴリアン(Gregoriana)大学 マテオリッチ講堂。出席者約150名。(参照： *The Journal Gregorianum*, Rome, 2014)

C-7 国立プノンペン大学から名誉博士号授与 (2020年)

石澤良昭教授は、2020年に国立プノンペン大学開学60周年を記念し、カンボジア王国に多大の貢献があった理由で同大学から「名誉博士号」授与決定の通知を受けた。コロナ禍のため授与式は未済。

文部科学省科学研究費など公的助成金 (1986年～2018年) 受領一覧 (石澤良昭が研究代表者・拠点リーダー・事業担当責任者)

助成年	内 容
1986年	昭和61・62・63年度日本学術振興会国際共同研究（1年次：宗教とアジア社会（キリスト教とアジア社会）、2年次：宗教とアジア社会（仏教とアジア社会）、3年次：宗教とアジア社会（儒教とアジア社会））研究代表者（～1989年3月）
1987年	昭和62年度文部省研究成果公開促進費（「大学と科学」公開シンポジウム『アジア、その多様な世界』）研究代表者
1987年	昭和62年度文部省海外学術研究（下ビルマにおけるビルマ人社会の形成研究）研究代表者
1991年	平成3・4・5年度文部省科学研究費補助金重点領域（文明と環境：アンコール文明・マヤ文明の盛衰と環境変動）研究代表者（～1994年3月）
1993年	平成5・6・7年度文部省科学研究費補助金国際学術研究（カンボジア・アンコール・トム遺跡学術調査）研究代表者（～1996年3月）
1996年	平成8・9・10年度文部省科学研究費補助金国際学術研究（「熱帯アジア（東南アジア・インド）の遺跡調査による新発掘保存修復方法論の構築研究」）研究代表者（～1999年3月）
1996年	平成8・9・10年度国際交流基金アジアセンター（アンコール時代窯跡調査・保存・公開マスタープラン作成プロジェクト）研究代表者（～1999年3月）

1996年	平成8年度文部省科学研究費補助金研究成果公開促進費（「大学と科学」公開シンポジウム『アジア知の再発見』）研究代表者
1997年	平成9・10年度国際交流基金アジアセンター（カンボジア・シェムリアップ州村落における民族伝統文化財の基礎的調査）研究代表者（～1999年3月）
1999年	平成11・12・13年度文部省科学研究費補助金国際学術研究基盤研究（A）（「熱帯アジア（インド・東南アジア）3国の村落と文化遺産の共存モデル案構築研究」）研究代表者（～2002年3月）
2002年	平成14年度国際交流基金アジアセンター（『アンコール・ワット付近から発掘された大量の仏像の調査・研究目録』出版）研究代表者
2002年	平成14・15・16・17年度文部科学省科学研究費基盤研究（A）（熱帯アジア（東南アジア・インド）における歴史水利都市の調査・研究）研究代表者（～2006年3月）
2004年	平成16年度国際交流基金アジアセンター（国際シンポジウム『文化遺産とアイデンティティとIT（情報技術）—アンコール・ワットと3次元（3D）技術の活用』）研究代表者（～2005年3月）
2006年	平成18・19年度文部科学省科学研究費基盤研究（B）海外調査（カンボジアとインドにおけるナーガ座仏のルーツ研究）研究代表者（～2008年3月）
2013年	平成25・26・27年度文部科学省科学研究費基盤研究（A）海外調査（検証アンコールワットへの道）研究代表者（～2016年3月）
2015年	平成26年度国際交流基金アジアセンター（アンコール・ワット修復人材養成プロジェクト形成のための調査・研究活動）事業担当責任者（～2015年5月）
2015年	国際交流基金アジアセンター（アンコール・ワット修復人材養成プロジェクト）事業担当責任者（～2018年6月）

以上

Forty Years after President Joseph Pittau, S J

—Sophia Mission (since 1979) and Sophia University Asia Area Studies—

By Yoshiaki Ishizawa

Professor, Sophia University

Director, Sophia Asia Center for Research and Human Development

2017 Ramon Magsaysay Awardee

A-1. The Sophia Mission for “Refugee Relief” (International Service Activity) by the whole University (since 1979)

A great turbulence arose in Cambodia in 1970, when the country faced the impact of the war in neighboring Vietnam. Under the Pol Pot regime (1975–1979) there occurred a massive genocide of over a million and a half people, and a few million Cambodian refugees fled this chaos by moving to the Thai border. Later in 1979 the Heng Samrin regime appeared in Cambodia, a regime backed by Vietnam. The civil war which comprised four blocs including this one, namely the Pol Pot, Sihanouk, and Son Sann blocs, persisted for 24 years until 1993.

The Sophia Mission International Service comprises a global service activity by students, faculty members, and advocates of Sophia University, which commenced in 1979. We were unable to ignore the Cambodian refugee issue, and so in 1979 the university began a relief campaign entitled “Extending hands of Love to Indochinese Refugees.” In December of the same year, under the leadership of President Pittau, S J, the Faculty and staff stood at the entrance of Shinjuku Station and conducted fund-raising activities for “Indochinese refugees.” Food and medicines were conveyed to refugee camps located on the Thai border such as Khao-I-Dang and Sa Kaeo, and student volunteers were dispatched to centers that accommodated war orphans.

Yet, peace dialogues proceeded below the surface. The Cambodia Paris Peace Conference was convened in October 1991, and through this Paris peace accord the Supreme National Council (SNC) was constituted, comprising four blocs including the Heng Samrin faction. Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary Yukio Imagawa of Japan was assigned a fresh task at Phnom Penh, and Yasushi Akashi was appointed representative of the United Nations Transitional Authority in Cambodia (UNTAC), in 1992. Even more, Mme. Sadako Ogata, United Nations High Commissioner for Refugees (UNHCR) (and Professor Emeritus of our university) aided the return of the Cambodian refugees, and in 1993, Cambodia as a kingdom started nation-building once again, from scratch.

A-2. Refugees comprise problems for ‘Humanity’ and basically ‘Humanness’

—The decision of Sophia University— (1980)

President Pittau, S J, declared, “Now in the Indochinese Peninsula hundreds of thousands of people, millions of people, have been displaced from their homes and suffer as refugees. We should not forget such people. In Sophia University, since the end of last year (1979), not only have we carried out the accumulation of funds, but students of Sophia are currently working intently as volunteers, engaged in works of service within refugee camps in Thailand. This task was not

commenced merely on an impulse. We began because we believed this to be the fundamental ideal of Sophia University, and what's more, it is linked to our core as human beings, to the core of our humanness." Having said this, he commenced fund-raising activities at Shinjuku station. [*Sophia University Newspaper*, No. 84, Issued on March 25, 1980].

President Pittau, SJ, subsequently continued, expressing the following resolution, "when I stated that this fund-raising activity would be conducted not just within the campus, but that at the close of 1979 I intended conducting it at the entrance of Shinjuku station as well, I was happy to see that students as well as members of the administrative and teaching staff spontaneously began to stand at the station. Within two weeks a collection of 700 million yen was made. I thereupon flew to a refugee camp in Thailand. I mused over the issue of offering food and medicines, the option of sending Sophia students as volunteers, and conducting an inspection. I visited some refugee camps scattered near the Cambodian border. It was a sorrowful sight. One of them was an orphanage center that sheltered orphans, and I felt that in such a place even students could play with them, take care of their surroundings, and so on. From February the next year over a period of two years, students and members of the secretarial and teaching staff entered the site in steady sequence." [Witness of the Times, *Yomiuri Shimbun*, November 5, 2009].

A-3. Saving Angkor Wat in order to reclaim the Pride of the Cambodian People (1980)

Why has Angkor Wat become the detonator that rejuvenates the people? The reason is because under the Pol Pot regime archaeological conservation officers were viewed as intellectuals, and hence out of around 40 of them only three managed to survive and return alive. Moved by a desire to console and reclaim the ethnic pride of the Cambodian people who had been blighted by the civil war, the Sophia Mission, which was involved in the rescue of both refugees relief and ruins, proposed as a place of reconciliation the construction site of Angkor Wat, a site revered by all Cambodians. In the 1980s, the archaeological relief team entered Cambodia which was smoldering from the dust of combat, and from 1993 they commenced providing human resource training to the Cambodians at the western causeway of Angkor Wat. They set about working on the restoration of Angkor Wat, for the sake of both ethnic reconciliation and the creation of an identity among the Cambodian people. We even advanced our proposal a step further, by presenting as the goal of our human resource training the fact that the restoration of the monuments should be carried out by the Cambodians for the Cambodians. In 1996 Sophia University purchased land in Cambodia, and erected the "Sophia Asia Center for Research and Human Development. This is the first instance of a university in Japan opening a permanent area studies center in Southeast Asia. Currently we are continuously involved in targeting the relief work linked to refugees and the Angkor monuments, as well as the training of Cambodians as conservation officers, and the research in area studies that accompanies it.

A-4. In 1980, President Pittau, SJ, in his New Year's Address said, "Collaborate with Asia and strengthen Asian studies in order to build a new world (1980)

"This is the opening year of the 1980s. What manner of a path should Sophia University hereafter take? "Quality before quantity." That has been a key policy of ours so far, and I wish to continue advancing it firmly forward. During the 1980s our dream of a central library may be realized. Over

there our academic ambience will be enhanced, and I am of the view that the deepening of our spiritual ambience will hereafter become a topic for us all. Second, on considering the founding spirit of Sophia University, we realize that we need to offer an education befitting this eternal value. Third, I have a great hope. Until now Sophia University has focused its eyes towards the West and has emphasized an internationality centered on the West. In the coming 1980s I feel we have a mission to comprehend Asia and cooperate with it, so as to create a new world while focusing on Asia. That is to say, the significance of internationality is to be reviewed and clauses linked to the reinforcement of Asian studies need to be incorporated, within the ten-year plan that was framed four years ago. [Quoted from *Sophia University Newspaper*, Issued on January 23, 1980].

A-5. The Creation a New World by collaborating with Asia. The decision to establish the 'Institute of Asian Cultures' (1980–1982)

In March 1980, the Board of Trustees of Sophia University granted approval to the Asian Studies System (Plan for the creation of the Institute of Asian Cultures), and at a meeting of the University Council held on June 25, 1980, the launch of the Institute of Asian Cultures (provisional title) was mulled over as part of the agenda. President Pittau, S.J., proposed the concept of the plan, and endorsed the objectives behind its establishment. Later on September 30, 1980, the first meeting of the Preparation Committee for the Establishment of the Institute of Asian Cultures (provisional title) was held, and the chairperson of the committee presented an explanation as follows. “For now, I wish to consider fields that we lack in our existing research organizations. Research in Islam for instance, shall be the object of our focus. Africa also may possibly be included. Stress will be laid on humanities and social sciences, such as history and religion. Nations under focus will include the Philippines and Indonesia, but Islam would be the object of focus. A reason for presenting this new area was also to impart a fresh taste. The Philippines, Indonesia, and Southeast Asia form the three pillars of area studies.” Also, the aim behind the launch of the “Institute of Asian Cultures” was to raise “in an East Asian corner a foundation for Christian Humanism. This was done in view of the university’s founding philosophy that seeks east-west cultural exchange, by carrying out all-inclusive enquiry and research on the religions, languages, societies, histories, and other such fields within the diverse regions of Asia, whose people are our neighbors and friends. Today, the significance of conducting essential educational activities in this context, is steadily increasing. Hence, research on the culture and society of the Asian regions, which will constitute a lasting feature of the university in the future, and particularly specialized research on the traditional cultures and lifestyles of these regions, should be carried out. In addition, based on such a perception, we hope a research institute will be established with the aim of understanding current social and cultural phenomena. By launching such an institute we shall aim for academic and cultural exchange with diverse Asian regions, and inform the world of the results of our own research and exchange. The goal behind the founding of this institute is to contribute to peace and development, not just in Asia but in the world as well.”

Next, regarding the establishment of the teaching body, namely the “Minor in Asian Cultures (provisional title),” the Faculty of Foreign Studies concurred with its institution and so the Minor in Asian Cultures was approved. On February 18, 1981, the University Council approved the

Regulations of the Sophia University Institute of Asian Cultures, and also the fact that the Faculty of Foreign Studies would be the founding body of the Institute. Dr. Mutsuo Yanase, S.J., served as the university president, yet he was appointed as the first director of the Institute of Asian Cultures.

A-6. Opening of the Angkor Research Office within the Institute of Asian Cultures on April 1st, 1992

From 1979 our university has been involved in relief activities for Indochinese refugees, and in the Institute of Asian Cultures that was initiated in 1982 which had 3 people including the director, the tackling of the Cambodian refugee issue and relief issue of the Angkor ruins continued. From the latter half of the 1980s work aimed at peace-building began in Cambodia, and media associated with groups such as the United Nations Transitional Authority in Cambodia (UNTAC) and the Japan Self-Defense Force (PKO), had continuously reported on Cambodia. In Japan, volunteers hailing from the industries, academia, and government, assembled to form a voluntary organization for the relief of Angkor Wat. Officially, the “Angkor Monuments Relief Committee” was formed on April 17, 1991, with Rokuro Ishikawa (President of the Kajima Corporation) as chairman, Yoshiaki Ishizawa (Director of the Institute of Asian Cultures) as secretary general, and Attorney Mme. Miyuki Sakai, Vice-President of the Sophia University Angkor International Mission assumed office as auditor. Following this, under the direction of President Keiji Otani (1993–1999) who assumed the post of advisor, on April 1, 1992, the committee secretariat, that is the “Angkor Research Office,” was opened within the university’s Institute of Asian Cultures. Commencing with the Ministry of Foreign Affairs and Agency for Cultural Affairs, in this committee about 65 companies including media companies, general contractors and others took part, and in October the same year the Cambodian Peace Accord was signed in Paris.

In 1979, having raised the issues of both refugee relief and the relief of Angkor Wat, Sophia University decided to erect an overseas research base at the site of the ruins. The Sophia University Angkor Training Center has a site of area 4800 square meters, a training center main building of 282 square meters, and a warehouse of 36 square meters. The inauguration ceremony was conducted on August 29, 1996, and around 80 individuals including Van Molyvann, the Minister of State of the Kingdom of Cambodia, were present, and President Otani delivered a congratulatory address. All expenses linked to the erection of the training center including the cost of land acquisition, were fully covered by donations. Compliments were conveyed by the Asahi Shimbun, the Tokyo Marine & Nichido Career Service, the Shiseido Company Ltd., the Kyuryudo Co., Ltd. and other warmhearted individuals. The address of the center is: Phum Treang Slokram village in Srok Siem-Reap County, Siem Reap Province, Kingdom of Cambodia.

A-7. October 2002. Retitled, the “Sophia Asia Center for Research and Human Development” —the “Grand Layout” of the University’s Overseas Research Base. No. 1— (2002–2013)

In May 2001, in view of the centennial of the university’s founding, the Board of Directors of the Sophia School Corporation proclaimed within and outside the university a “Sophia University Education, Research, and Campus Revitalization Grand Layout (New Hoffman Project).” Here, the first point was the establishment of the Sophia Asia Center for Research and Human Development.

The object of this establishment was to provide facilities in support of the independence of the people of Asia. Yet we shall simultaneously learn from the local regions of Asia, and by conducting collaborative works with the residents of those areas (survey, research, onsite training and so on), we shall further the growth of those areas via research on new regional resources, such as villages, environment, regional development, ecosystems, cultural heritage, and so on. In close cooperation with Sophia's faculties, graduate schools, graduate divisions and so on, we shall conduct in Asia area studies that includes Southeast and South Asia, and collaborate with local state governments and municipalities. Aside from training human resources in Cambodia, this center aims at making academic contributions to the global and Asian worlds, on the basis of the intensive area studies that arises from the region. Its form of establishment was as a "university-affiliated educational research institute" of a "Jesuit mode," situated close to the site. Sophia University's educational spirit of "Men and Women for Others, with Others," is currently being applied in Asia. In Cambodia there is a legacy of "knowledge" to be gained, and besides, we have sustained the posture of speaking about the "knowledge" of Japan. This has served to increase the credibility of Cambodians. International cooperation in the development of human resources for conserving and restoring the archaeological sites will progress onwards with the aid of the villagers in the vicinity, by viewing as a trinity the archaeological sites (culture), community (people) and forests (nature).

A-8. What manner of local human resources do we train? (1996–Present)

Formal Area Studies at Sophia University is based on research at the local level, and it is viewed as having local level research as its starting point. Researchers dedicate their efforts to the field, and it eventually comes to be established as a shared work place done with others. It is the initial base for Asian area studies in a Japanese university, a research base with fixed-point observation significance, that clarifies the regional uniqueness of Asia and tackles global issues.

1) Training of Conservation officers, stonemasons, and others:

Since 1991, based on the on-site training in archaeological excavation and archaeological site restoration, we accepted Cambodian trainees in archeology, architecture, and conservation science. We trained candidates who could acquire degrees or learn the equivalent academics and techniques to serve as conservation officers and area researchers.

2) Training of Angkor area researchers:

From among the conservation officers, area researchers, stonemasons, and workers, we train researchers who promote research pertaining to their own countries, based on nature (forests), humans (villages), and culture (ruins). We expect specialists and researchers in fields such as conservation, academic promotion, cultural tourism, and lifelong education to be produced.

3) Training of volunteers in cultural heritage conservation:

We train, (1) Volunteers to protect the ruins. (2) Volunteers to protect villages. (3) Volunteers to protect the forests. Monks of the pagodas, villagers, office workers, elementary and junior high school teachers, and others living close to the ruins offer courses on cultural heritage conservation for villagers, tutor them on the significance, value, and importance of the archaeological excavation and temple restoration sites, and seek to deepen their perception of them. ["Sophia Asia Center for Research and Human Development –The Purpose behind its establishment," October 2002,

Grand Layout, First Phase (2001–2005) Board of Directors, Sophia School Corporation]. [Please refer: “*Tokyojin*, No. 333, 100 Years of Sophia University and the Yotsuya Locality,” December 2013, Special Issue, pp. 50–53], [From A-4 to A-8, please see., Yoshiaki Ishizawa “Joseph Pittau, S.J, and Sophia Asia Center for Research and Human Development: The First Grand Layout, Sophia Mission in the Field of Asia,” *Investigation of the Angkor Monuments* (No.20), Sophia Asia Center for Research and Human Development, 2016, pp. 11-28].

B-1. Urgent necessity to train Government Officials for the Kingdom of Cambodia in the 1990s: Graduate School Education for Cambodian Foreign Students —From the Degree Acquisition Program— (1994–2014)

The first three Cambodian international students to join the Sophia University Graduate School of Area Studies did so in 1994, and they were executive candidates of the Kingdom’s Government. A total of 18 international students had to complete and submit a doctoral thesis in English, within a period of 5 years. They entered Japan with the responsibility of building a nation, yet they had no opportunity to acquire the English necessary to write a treatise, owing to the fact that their home country was in a state of civil war. In their first year they attended all English classes offered on campus, and besides several priests of the SJ House who happened to be professors at the Sophia university lent a helping hand, by assisting them in touching up the English theses they wrote. In addition, their Japanese classmates and others, and also Sophia University as a whole, assisted those Cambodian foreign students. Those who submitted treatises for the attainment of degrees were 18 in number, (7 doctoral and 11 master’s theses). All of them subsequently returned to their home countries, and they are currently active working in key positions within the Government of the Kingdom of Cambodia. In 2019, Ms. Oum Ravy, the Vice-president of Phnom Penh University, and Mr. Ek Bunta, Deputy-Director General in the Department of Intangible Cultural Heritage of the Ministry of Culture and Fine Arts of the Kingdom of Cambodia, both of whom had acquired degrees from the Graduate School of Area Studies of Sophia, were awarded the illustrious Commendation of the Minister for Foreign Affairs of Japan. It was the first Cambodian commendation of the Japanese Government for their “contribution to the friendship and goodwill between Japan and Cambodia.” This was the best news for Sophia University. [Reference: Yoshiaki Ishizawa “Two Graduated Cambodian Students of Sophia University received a public recognition from the Ministry of Foreign Affairs of Japan,” *Investigation of the Angkor Monuments* (No. 21), Sophia Asia Center for Research and Human Development, 2020, p. 12].

B-2. The 1996 Ethnic Unity Project at Angkor Wat —The First Phase of the Initiation Ceremony for the Western Causeway of Angkor Wat— (1996–2007)

On August 29, 1996, (Heisei 8), an initiation ceremony was held in Siem Reap, that was attended by President Keiji Otani. This construction project on the western causeway was a joint venture, realized with the National Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem-Reap (abbreviation: APSARA Authority). Ethnic rallying projects having a large ripple effect were begun in Angkor Wat via the guidance of the late Professor Masao Katagiri of Nihon University and the late Takayuki Kosugi a stonemason, so as to inspire Cambodians striving to

rebuild their nation, assisting those who have begun building a country from scratch. In November 2007, of 200 meters of the western causeway 100 meters of the first construction zone was completed after 12 years of restoration work, and the formal opening of the causeway was carried out in the presence of His Excellency Sok An, Deputy Prime Minister of the Kingdom of Cambodia, and 2,400 neighbors who had assembled. [Reference: Sophia University Angkor Ruins International Survey Team, *Angkor Wat Western Causeway Restoration Work Phase I*, 2011].

B-3. A Great discovery of the Century. Excavation of 274 Buddha statues from the earth —Erection of a Museum in Siem Reap, Cambodia with the cooperation of Aeon Co. Ltd.— (2001, 2010)

In 2001, 274 Buddha statues were by chance excavated from an underground pit in the precincts of Banteay Kdei Temple, and this was literally a great excavation of the century. Jayavarman VIII (1243–1295) who had gained a zeal for Hinduism, ordered a show of hostility towards Buddhists who formed the opposition (that is to say, he ordered the rooting out of Buddha statues). These vast numbers of Buddhist statues that formed a national treasure were excavated by Cambodian trainees during their archaeological training, and in August 2010, eight more Buddha statues were unearthed from the same precincts. In March 2002, Mr. Takuya Okada (Honorary Chairman of Aeon Co., Ltd.) stopped by the Sophia Asia Center for Research and Human Development, to witness the 274 rejected Buddhas that had been temporarily stored. Impressed by the beauty of the statues he proposed erecting a museum to display them, and the entire construction cost was donated by him to the university. The museum is a two-story structure having a building area of 1,728 square meters, erected over a site of 16,200 square meters. On November 2, 2007, the inauguration ceremony of the museum was held in the presence of His Majesty King Norodom Sihamoni, and at the same time Aeon Co. Ltd. issued a letter of presentation of this museum building to the APSARA National Authority. The national emblem of the Kingdom of Cambodia is displayed in front of the museum entrance, and it has been declared the most prestigious museum for Buddha statues in Cambodia. [Catalog of Buddhist Statues: Ishizawa Yoshiaki, Supervision/Authorship, *Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum, Angkor Buddhist Treasures from Banteay Kdei*, NHK Publishing, 2007].

B-4. 2003 Sophia University Off-Campus Joint Research: Angkor Monuments Environmental Conservation Project —ISO14001 Certification Acquisition Plan— (2003–Present)

In 2019, around 6.5 million tourists visited the Angkor area. Around 2000, with this rapid increase in tourists however there arose certain serious problems, such as the worsening of the ruins, accumulation of vast quantities of garbage, air pollution due to vehicle exhaust, river water pollution due to untreated sewage, damage to natural forests due to building hotels and parking lots, vanishing of the historical scenery, and so on. The UNESCO and other bodies have voiced concern over this ecological destruction. From May 2003, by way of a joint project outside the university, with a view to get the certification of the “International Organization for Standardization (ISO),” we carried out practical training on environmental preservation for about 1,200 staff members, over a period of 3 years. As regards this practical training Sophia University, the International Standards Institute, and

the Japan Quality Assurance Organization (JQA) dealt with the issue of environmental conservation education, and after undergoing extremely arduous examinations, we obtained the “ISO14001 certification” in March 2006. In April of the same year a certification ceremony was conducted at Angkor Wat, and the words “ISO14001” was printed on the archaeological site admission card. This gaining of the ISO14001 in the “World Heritage” area was the first in the world, and it was an event highly appraised by the UNESCO. [Reference: *Sophia University Newspaper*, No. 319, Issued on June 20, 2006].

B-5. Sophia University’s 21st century COE Program from Cambodia —Aiming at a reorganization of “Knowledge” in Asia— (2002–2006)

The “Sophia University 21st century COE Program (2002–2006)” from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, was evaluated as a research program aimed at forming a global research and education center, and the creation of an “area-based global studies” that was submitted by the university, was adopted. The reason for its adoption was the fact that the Japan Society for the Promotion of Science stated, “The achievements of comprehensive research and exchanges on the history and culture of Cambodia, and especially Angkor Wat, can be assessed. Utilizing an internationality that is characteristic of Sophia, we look forward to the creation of the type of Global Studies that can be promoted more definitively (Website of the Japan Society for the Promotion of Science).” Four international symposiums were held over a period of 4 years, at our research center in Cambodia. The first was on “Creating a Methodology for Global Studies from the Areas.” It was held from December (27–29), 2002, and about 180 people participated (from 8 nations). The second was on “Cultural Heritage, Identity, and IT (Information Technology).” This was held from March (12–14), 2004, and about 130 participated (from 12 nations). The third was on the theme, “Is a Cambodian version of regional self-sustaining development possible? Let us permit the voices of little people and farmers to be heard.” This was held from February (21–22), 2005, and about 120 participated (from 9 nations). The fourth was on “Cultural Heritage, Environment, and Tourism.” It was held from December 31, 2005 to January 1, 2006, and around 180 participated (from 11 nations). [Reference: Yoshiaki Ishizawa and Masako Marui, *Global and Local Cultural Heritage*, Sophia University Press, 2010].

B-6. “Program for Promotion of Internationalization in University Education,” by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology —Support for Strategic International Cooperation— (2006–2009)

Sophia University applied to and was accepted for the (2006–2009) program labelled, “Promotion of International Cooperation that contributes to Cultural Heritage Education Strategies—International Education Program for Conservation Officers and Researchers in Tropical Asia.” At the Sophia Asia Center for Research and Human Development, graduate-level lectures and on-site training were held for 4 years, having as the main topic the conservation and restoration of cultural heritage. This program was juxtaposed to the Area Studies Program of our graduate school, and it became the first established graduate school education program in Japan that dealt with “cultural heritage studies.” Meetings in English by specialists on Asian cultural heritage, as well as on-site

experience training sessions, were held. The professors who attended came from Japan, France, Cambodia and Myanmar, and the graduate students who joined for a period of 4 years totaled around 90. They hailed from Japan, France, and Cambodia, and gained credits for their study from the graduate school of Sophia University. [Reference: *Promotion of International Cooperation that contributes to Cultural Heritage Education Strategies—International Education Program for Conservation Officers, Researchers in Tropical Asia*, Sophia Asia Center for Research and Human Development, 2006–2009].

B-7. “Sophia University Internationalization Center Development Project (Global 30)”
—A Local Asian Project modeled on Sophia— (2009–2013)

Our university along with 13 others nationwide, was chosen for the “Global 30 (Project for Establishing Internationalization Centers)” (2009–2013). Here, what is most special, is the fact of its having been chosen from among universities all over the nation. Graduate school education in English was realized in the Faculty of Science and Engineering, and this led to a subsequent deepening in education and research. In January 2012, ten individuals from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology of the Government of Japan, including Mr. Masaharu Nakagawa, Minister at that time for Education, Culture, Sports, Science and Technology, visited the site of the Angkor Wat Western Causeway restoration work, to inspect the site of the project for the institution of an internationalization base. At the site, Dr. Ly Vanna, a Cambodian who had obtained his degree at our graduate school (and who at the time was Director of the Sihanouk Aeon Museum), 5 other Cambodians who had also gained degrees at our graduate school, and 19 officials (stonemasons) in charge of the construction at the Western Causeway of Angkor Wat welcomed the group, and they themselves described to the visitors the outcome of the over 20 years of international cooperation and local human resource development, that our university had achieved in Cambodia. Sophia University’s Internationalization Center Project in Asia, is linked to the University’s founding spirit. It has drawn worldwide attention as a Sophia model, and has been valued as a pioneering project.

B-8. Agency for Cultural Affairs “International Cooperation Center Exchange Program —
Center Exchange Program for the Preservation of Cultural Heritage in Cambodia”—
(2010–2013)

The Research Center, by way of the “Center Exchange Program for the Preservation of Cultural Heritage in Cambodia” (2010–2013) of the Agency for Cultural Affairs held a specialist training program, wherein it promoted preservation and restoration of cultural heritage to around 20 Cambodian archaeological and architectural students, over a period of 4 years. Here professors and specialists from Japan and Cambodia were in charge of specialized lectures and practical training. The same program was first initiated from July to September 2010, the next initiation was from July to September 2011, the third from December 2011, and the fourth from July to September 2013. Concurrently a public symposium (in both English and Cambodian), the “International Symposium on Khmerology in Phnom Penh,” was held at the University of Phnom Penh in January 2012. [Reference: Ishizawa Yoshiaki, *Preservation of Cultural Heritage in Cambodia*, Sophia Asia Center for Research and Human Development, 2013].

B-9. Cultural Heritage Preservation Center Exchange Project in 5 Southeast Asian Nations
—Agency for Cultural Affairs “International Cooperation Center Exchange Project—
(2014–2016)

The “Center Exchange Project for Cultural Heritage Protection in 5 Southeast Asian Nations” was conducted at our university’s Sophia Asia Center for Research and Human Development in Cambodia. Forty-three individuals in charge of cultural heritage sites from the 5 continental Southeast Asian nations of Thailand, Myanmar, Vietnam, Laos, and Cambodia, gathered to present their country reports, and they had a lively question and answer session. [Reference: *Achievement Report of the Center Exchange Project for the Preservation of Cultural Heritage in Five Southeast Asian Nations*, Sophia Asia Center for Research and Human Development, 2014, 2015, 2016 (No. 3)].

B-10. Restoration of the Western Causeway of Angkor Wat in All Japan
—Phase 2 of the construction commences— (2016–2024)

The second phase of the restoration of the Western Causeway of Angkor Wat (2016–2024), began as a joint task with the National Apsara Authority. This work was chosen as Overseas Development Aid by the Ministry of Foreign Affairs, (General Cultural Free Fund Cooperation: The equipment provided was 94 million yen). The equipment necessary for the restoration came from Japan, and is currently in use. Specialists of both nations formed the “Angkor Wat Western Causeway Restoration Technology Exchange Training Committee” (technical education and construction guidance), and continued the construction while discussing technical issues. This is the fourth year since they began in 2016. There were 4 reports have been published. [Reference: *Angkor Wat Western Causeway 2nd and 3rd Construction Zone Restoration Work Design/Construction Plan*, Angkor Wat Western Causeway Restoration Technology Exchange Training Committee Edition, 2017, *Angkor Wat Western Causeway 2nd and 3rd Construction Zones Restoration Work Design and Construction Basic Plan*, edited by the same committee, 2018, *Report on the Outcome of the Activities of 2018*, edited by the same committee, 2019, *Report on the Outcome of the Activities of 2019*, edited by the same committee, 2020. The 4 volumes are published by Sophia Asia Center for Research and Human Development].

B-11. The Sophia Mission (Sophia University) receives the 2017 Ramon Magsaysay Award

The Sophia Mission, which encompasses the international service of Sophia University, was conferred the R. Magsaysay Award, which is referred to as the Asian Nobel Prize. The award ceremony was held on August 31, 2017 in the city of Manila, in the Philippines. This is an international award, created in commemoration of the late President Ramon Magsaysay of the Philippines. At the ceremony, a councilor of the award foundation declared, “Based on the conviction that the conservation and restoration of the Angkor Wat ruins had to be carried out by the Cambodian people, (1) Efforts were made to train Cambodian experts in safeguarding the Angkor ruins. (2) This was an opportunity for Cambodians to regain their national pride. (3) The reason for conferring the award is the fact that the global community has hereby widely made known to the world the value of preserving our cultural heritage as signified by the Angkor Wat ruins, as a treasure for humankind.”

Professor Ishizawa of this Sophia mission activity declared, “This award is an international evaluation of the Sophia mission, promoted by Sophia University in Cambodia. I was able to carry it out with the continuous support of the university. I am grateful.” [Reference: “Awarding of the Ramon Magsaysay Award in 2017,” *Investigation of the Angkor Monuments* (No. 21), Sophia Asia Center for Research and Human Development, 2020, p. 9]. [Commemorative Lecture of the Ramon Magsaysay Award of Professor Yoshiaki Ishizawa, *Practicing the Founding Spirit in the Field of Asia*, November 6, 2017) (unpublished)]

B-12. Center Exchange Project for the Passing on of Cultural Heritage and the New role of Museums in 10 nations of ASEAN (Agency for Cultural Affairs 2017, 2018, 2019)

Within the 10 nations of ASEAN, museums have faced problems dealing with “development relics,” that appear due to the construction of roads and hotels in the nations concerned. We got people in charge from the ten nations to assemble at the Angkor archaeological site in order to discuss the problem of development relics, and summarized the issues in three reports. The venue was Siem Reap city (Sophia Asia Center for Research and Human Development), and the workshop dates were: November (13–19), 2017; November (2–8), 2018; November 25–December 2, 2019. [Reference: (Presentation in English): Yoshiaki Ishizawa, “The Passing on of Cultural Heritage and the New Role of Museums in the 10 ASEAN Nations,” No. 1–No. 3, Sophia Asia Center for Research and Human Development, 2017–2019, Tokyo] [Reference: (Presentation in English): Yoshiaki Ishizawa, Activities for Exchanges in International Cooperation for Inheritance of Cultural Heritage Properties and the New Role of Museum within ASEAN 10 Countries (Report in the International Workshop in 2017–2019), ICOM, Kyoto 2019. Venue: Inamori Memorial Hall Kyoto. Date 2nd September 2019].

B-13. Special training for mid-level Cambodian executives on excavating ancient kiln ruins (1999–2000)

A large group of ancient kilns were discovered in Tani village located in the Siem Reap Province of Cambodia, and with the support of the Japan Foundation, training was conducted on the preservation of old kilns, among the kiln ruins of Tani village. Twelve trainees in archaeology from Japan and Cambodia attended, and the late Professor Yoji Aoyagi and Researcher Hiroshi Sugiyama showed practical examples in detailed lectures on kiln site maintenance and their public exhibition. [Reference: Yoshiaki Ishizawa, *Special training for Cambodian mid-level Executives on the excavation of ancient Kiln sites, Two-year Plan*, Report, Sophia University, 2000].

Activity Record of a small Sophia Mission

C-1) Three Jesuit priests organized the students exchange program in 1959 (Frs. Rietsch, S.J, Gomane, S.J, and Larre, S.J) launched the AUVIT (Amitié Universitaire entre Vietnam-Japon-Thailande), and they had been conducting student exchange in three Southeast Asian nations. (1959–1964). In 1964 this activity was canceled due to the outbreak of the Vietnam War.

C-2) At the Royal University of Fine Arts (in Phnom Penh), intensive lectures were delivered by Japanese professors, and the site of the lectures was the Royal University of Fine Arts. (Period:

1991–2001). A total of around 2,800 students participated. Japanese professors from Sophia University, created the program and were in charge of those special lectures, because Cambodian professors had almost disappeared owing to the purges conducted by the Pol Pot regime. They entered the country via Phnom Penh for human resource training at the Angkor archaeological site, but remained in Phnom Penh on their way to Siem Reap, and they were in charge of those intensive lectures. (A volunteer activity).

C-3) An NHK special program entitled, “Water Empire Angkor Wat,” was broadcast on November 16, 1997. In the Angkor dynasty era wherein the nation thrived in agriculture, we reproduced by the use of computer graphics the raised footpaths between rice fields of about 900 years ago, from the 1/5000th topography material produced by the JICA. This was to show how the two-crop system of rice paddy irrigation was carried out. It helped in the clarification of the Angkor dynasty’s Hydraulic city and was well received. This JICA map supports the theory of Groslier’s study on the hydraulic city.

C-4) NHK “Project X Challengers: The Bonds between Masters and Disciples who swear by Angkor Wat.” It was broadcast on November 21, 2001, and was very well received. It was also screened as an in-flight program of the Japan Airlines.

C-5) The opening of the Angkor Cultural Heritage Education Center —An enquiry into history hand-in-hand with local residents—

In December 2011, the “Angkor Cultural Heritage Education Center” was erected at the Banteay Kdei ruins by Japan’s Ministry of Foreign Affairs, via the Grassroots Cultural Grant aid. Professor Tsutomu Sakuma, the Head of the board of Trustees (currently Chancellor of Sophia University), attended the inaugural ceremony on behalf of the Sophia School Corporation. This center has a permanent display of teaching material panels, so that local residents as well as elementary and junior high school students can deepen their understanding of the cultural heritage of their nation.

C-6) An International Symposium, “Between Past and Future, the Mission of the Catholic Church in Asia: The Contribution of Sophia University,” was organized in Rome. A presentation was made by the Director, Professor Ishizawa, on the topic, *International Cooperation among Jesuit Universities in Asia, Sophia’s Current Development of Human Resources in Cambodia*. (Project in Commemoration of the Centennial of the founding of Sophia University). Date: March 14th and 15th, 2014, Venue: Matteo Ricci Auditorium, Pontifical Gregorian University. [Reference: *The Journal Gregorianum*, Rome, 2014. Between Past and Future, the Mission of the Catholic Church in Asia: the contribution of Sophia University]

C-7) In 2020, Professor Yoshiaki Ishizawa was notified by the National University of Phnom Penh that in commemoration of the 60th anniversary of the University’s establishment, he would be awarded an honorary doctorate. However the awarding ceremony has not yet been completed due to the COVID-19 transmission. Due to the COVID-19 pandemic.

A List of Public Grants (1986–2018)

(Dr. Yoshiaki Ishizawa was the Principal Researcher, Leader of the Center,
as well as Person in Charge and Responsible for the Project)

Year of the Grant	Content
1986	1986, 1987, 1988, Japan Society for the Promotion of Science International Joint Research [First year: Religion and Asian Society (Christianity and Asian Society), Second Year: Religion and Asian Society (Buddhism and Asian Society), Third Year: Religion and Asian Society (Confucianism and Asian Society)]. Principal Investigator (–March 1989).
1987	1987, Ministry of Education Research Results Publication Promotion Fund (“University and Science,” Public Symposium, “Asia, Its Diverse World”). Principal Investigator.
1987	Overseas Academic Research by the Ministry of Education, Science, Sports, and Culture in Showa 62, (Study on the formation of Burmese Society in Lower Burma). Principal Investigator.
1991	Ministry of Education Scientific Research Grant for Priority Areas for 1991, 1992, 1993, (Civilization and Environment: Rise and fall of the Angkor and Maya Civilizations and Environmental Changes). Principal Investigator, (–March 1994).
1993	1993, 1994, 1995, Ministry of Education Grant-in-Aid for Scientific Research International Academic Research, (Cambodia Angkor Thom Archaeological Survey). Principal Investigator, (–March 1996).
1996	1996, 1997, 1998, Ministry of Education Scientific Research Grant International Academic Research, “Research for the Construction for a New Excavation, Conservation, and Restoration Methodology by Archaeological Survey in Tropical Asia (Southeast Asia, India).” Principal Investigator, (–March 1999).
1996	1996, 1997, 1998, Japan Foundation Asia Center (Angkor era Kiln site Survey, Preservation, Public Master Plan Creation Project). Principal Investigator, (–March 1999).
1996	1996 Ministry of Education Grant-in-Aid for Scientific Research, Research Results Disclosure Promotion Fund (“University and Science,” Public Symposium, “Rediscovery of Asian Knowledge”). Principal Investigator.
1997	1997, 1998, International Exchange Fund Asia Center, (Basic Survey of Ethnic Traditional Cultural Properties in Siem Reap Province, Cambodia). Principal Investigator, (–March 1999).
1999	1999, 2000, 2001, Ministry of Education Scientific Research Grant International Academic Research Infrastructure Research, (A), “Tropical Asia (India, Southeast Asia), Research on the Construction of a Model for the coexistence of villages and Cultural Heritage in three nations.” Principal Investigator, (– March 2002).
2002	2002 Japan Foundation Asia Center, (Publication of the “Investigation and Research catalog for a large number of Buddhist statues excavated from the vicinity of Angkor Wat”). Principal Investigator.
2002	2002, 2003, 2004, 2005, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), Grant-in-Aid for Scientific Research, (A) (Survey and Research of Historical Water Use in Cities in Tropical Asia (Southeast Asia and India). Principal Investigator, (–March 2006).
2004	2004, Japan Foundation Asia Center (International Symposium, “Cultural Heritage, Identity, and IT (Information Technology)–Angkor Wat and the Utilization of 3D Technology,”). Principal Investigator, (–March 2005).
2006	2006 and 2007, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), Grant-in-Aid for Scientific Research (B) Overseas Survey, (Study of the Roots of the Buddha on a Naga in Cambodia and India). Principal Investigator, (–March 2008).
2013	2013, 2014, 2015, Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), Grant-in-Aid for Scientific Research, (A) Overseas Survey, (Verification of the Road to Angkor Wat). Principal Investigator, (–March 2016).
2015	Survey conducted for the formation of the 2014 Japan Foundation Asia Center (Angkor Wat Restoration Human Resources Development Project). Person in charge and responsible for Research, as well as activities related to the Research Project, (–May 2015).
2015	Japan Foundation Asia Center (Angkor Wat Restoration Human Resources Development Project) Manager, (–June 2018).